

長縄光男・澤田和彦著
『異郷に生きる』
成文社、2001年、iv+264頁

渡 辺 雅 司

あれは25年程前のこと、札幌の私の校宅の庭でお茶を飲みながらロシア人のアジア認識の重要性が話題となった。中村喜和、栗生沢猛夫、そして故人となられた菊地昌典の各氏がおられたと記憶する。別れ際に原生林を見やりながら、中村氏が言った。「ロシア人と日本」で科研を申請しますか。共同研究「ロシアと日本」が始動したのはそれからまもなくのことだった。中村喜和、安井亮平、中村健之助、外川継男、笠間啓治、長縄光男といった錚々たるメンバーを中心に、延べにしたら何十人になるのだろうか、一橋と早稲田が事務局を担当し、定例の研究発表会や合宿を幾度も重ね、その度に予想もしなかった日露の人的交流が発掘され、参加者の一人であった評者は嬉しい驚きを禁じえなかったものだ。今にして思うと初期の頃は、皆手さぐり状態で、取り上げられる人物、視点も悪く言えば雑多であったが、こういうテーマこそ共同研究に相応しいのだろう、地道に調査を続けると思わぬ方角から、貴重な情報が提供される、それも実にさりげなく。各人が個別のテーマでやっているのは、炙りだされることのない事実が現前するのである。そんな快感をおそらく全員が味わったのではなかろうか。

そうした成果は「共同研究ロシアと日本」として第三集まで刊行（87年、90年、92年）されているが、ここでとりあげる『異郷に生きる——来日ロシア人の足跡』（成文社）はこうした共同研究の延長線上に生まれたものであり、長縄光男氏を代表とする平成9-12年度科学研究費補助金「基盤研究(B)(1)」「日本における亡命ロシア人の文化活動に関する総合的研究」の研究成果「ロシアと日本」（第四集）が単行本となってほぼ同時に出版されたのだった。

本書の内容の検討に入るまえに、巻末にある活動報告に注目したい。「来日ロシア人研究会」の中心となった長縄、沢田両氏の熱意もあってなんと五年間で二度の合宿をふくめ三十回の研究会を持ち、そこには研究分担者だけでなく、ロシアの日本研究者や今や古老というべきドクター・アクションノフ等いわゆる白系ロシア人から貴重な聴き取りを行い、平成十年からは会報「異郷」を発行、すでに十号に至っている。本書はこうした着実な活動のいわば氷山の一角なのだが、

日露関係に関心をもってきた評者にもはじめて知らされる事実が多く、読んでいて心が躍った。この裏にはこの研究会が狭義のアカデミズム以外の人にも広く門戸を開き、既成の研究者からはなかなか出てこないテーマをすくいあげていることがあるようだ。こうした裾野の広がりが従来の研究に欠けていたものなのだ。この垣根を取っ払った長縄氏の度量にまずは敬意を表したい。

六章構成の本書は、1. 来日ロシア人と日本文化、2. 北の地の来日ロシア人、3. 日本を訪ねて、4. 大陸の亡命ロシア人、5. 日本正教会のロシア人、6. ミセレーニア、から成っている。1では中村氏が谷崎文学に表れたロシアの影を、事実に即して跡づけており、最近では作家のプレトネル宛書簡が発見されたりしているから、国文の分野でも注目されることだろう。またボダルコ氏は北陸、関西居留のロシア知識人の足跡を、持ち前の精力的調査力で明らかにしている。沢田氏の論文は、白系ロシア人の文化的影響を網羅的に整理するだけでなく、膨大な数にのぼる来日ロシア人の生没年、生没地をつきとめている。こうした作業がどれほどの時間と集中力を必要とするかは、この種の作業をした者にしか分からない。とまれ日露関係をこれから始めようとする者には、必読の論文となることは必至。

第二章以下には力作が目白押しだが、紙数の関係もあるのでここでは、特に評者の印象に残った論文を数点選んで論じるにとどめたい。『「トナカイ王」ヴィノクーロフの生涯』（小山内道子）は、1994年にユジノ・サハリンスクで出たヴィシネフスキーの『オタス』に拠りながらも、北海道在住ならではの緻密な調査力を駆使して樺太では「オタスの酋長」として知られるヤクート人ヴィノクーロフの波瀾にとんだ人生を、革命、干渉戦、ソビエト政権の樹立と激動する北樺太の状況を見事に描きだしている。日本軍の協力者ゆえにソ連内務省に逮捕され、スパイとして仮装政治亡命をはかった（とされる）先が、先住民のモデル村「オタスの杜」であり、そこでもヤクート商人の才を発揮して財を築き、三度も東京にでて、荒木大将をはじめとする軍部のみか、松岡洋右や白系ロシア人とも親しくつきあっていることは、当時の新聞にも報じられたほどだった。結局彼はソ連側が仕組んだ罠にはまり、スパイとして日本軍に捕らえられ、刑に伏したのち大戦前夜に釈放されるが、それからほどなくして死をむかえる。ここには時代の波に翻弄されながらも、それを巧みにくぐり抜け骨太の人生を貫いた少数民族出身の英雄の姿が浮き上がってくる。著者は『オ

タス』を訳了しているとのことなので出版が待たれる。

『セルゲイ・キターエフと第二の故郷日本』(石垣香津)で紹介される日本美術の収集家キターエフの生涯は痛ましくも美しい。海軍将校として日本に寄港する度に浮世絵を中心とした美術品を収集したキターエフは、単なるコレクターではなく、岡倉天心とも親交を結んだ学究肌の人物だった。だからこそその日本美術を見る目は確かで、比較的名前を知られることのない絵師の作品や団扇絵までもふくむジャンルの広さが特徴だという。ルミャンツェフ美術館に保管された収蔵品も革命の混乱で購入されずじまいで、1918年に日本に家族とともにたどり着いた彼の、晩年についてはこれまで謎に包まれていたが、著者はそれを当時の新聞や聞き書きによって解明していく。美の狩人として第二の故郷を再訪したものの、日本はかつての日本ではなかった。瀟々たる成金趣味、それに追い打ちをかけるような詐欺事件にあり、1922年58歳で彼は発狂し、青山病院、松沢病院で晩年を送ることになる。翌年の震災後、家族も米国に去ってしまうが、皮肉なことに精神病院で彼は、日本精神医学の先駆者呉秀三とであり、その学識によってシーボルトの翻訳に協力することになるのである。それから70年近く経って、「帰ってきた秘蔵浮世絵展」が日本で開かれるのは、感動的ですからある。

『ヤンコーフスキー家の人々』(滝波秀子)はポーランド貴族として1863年の反乱に加わり、シベリア流刑にあった一族の三代にわたる年代記であり、この一族が移り住んだ沿海州のシジミ、北朝鮮のノヴィナが、亡命ロシア人の文化サロンとなり、日本、アメリカ、ソ連のあいだで一族の運命が交錯していくさまが、少ない枚数のなかで、立体的に描き出されており、読者の想像力をかきたてる。

またノヴォシビルスクで毎月発行されている旧ハルビン在住者の情報紙『満州の丘にて』をはじめで紹介した松村都の論文も、いまなお亡命文化が生きていることを教えてくれて新鮮である。

民衆史としての圧巻は、農奴の身分でクリミア戦争に参加、解放後日本に住みつき、幕末の箱館を拠点に貿易活動を展開、ニコライの協力者としてロシア正教の布教に貢献したアレクセーエフの生涯を再現して見せた故左近毅論文『存在の証明』である。左近氏は絶筆となったこの論文で、横浜の外人墓地に寄せ棟家屋型の墓碑を残す元農奴の生きざまをとおしてナロードの実像を甦らせてくれた。ここに氏の全仕事の投影を見る思いがする。

(わたなべ まさじ・東京外国語大学)

木下豊房・安藤 厚編著
『論集・ドストエフスキーと現代
——研究のプリズム——』
多賀出版, 2001年, 552頁

田 中 継 根

木下豊房氏の「序にかえて」によれば、本書は安藤厚氏を研究代表者とする科学研究費補助金による共同研究(平成8年～平成10年)の報告書『ドストエフスキーと現代社会』にまとめられた論文が基礎となっている。執筆者26名、論文数40本という壮大な規模の論文集となっている。全体は論文の内容・体裁などから「作品分析」、「比較・対比研究」、「バフチンの視点をめぐって」、「精神分析・宗教的視点から」、「研究ノート」の5部に分けられている。

40本の論文全部について紹介・批評することは紙数の制約上、もちろん不可能であるので、評者の価値基準からあるいは好みから何編かを選んで紹介・批評し、最後にこの論集全体についてコメントさせていただくことにする。

芦川進一氏の「『罪と罰』、隠された女神たち——ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって——」は、ラスコーリニコフのかつての婚約者ナターリアに焦点を当てた論文で、ナターリアはその性格・外貌・行動から判断して、作者から「福音書の磁場」を持たされているのは明らかで、ソーニャにつながる「隠された女神」であると論じている。従来、ほとんど注目されてこなかったと思われるナターリアに着目した好論文である。

『おとなしい女』論が3編収録されている。いずれも力作である。まず、木下豊房氏の「『おとなしい女』論——主人公の「不幸な意識」をめぐって——」は、『おとなしい女』の主人公の原型を『地下室の手記』の主人公に求め、その、無限の悪循環に陥った不幸な意識について論じている。氏によれば、『おとなしい女』の主人公は、『地下室の手記』のリーザ、『罪と罰』のソーニャといった、同情の眼差しを注いでくれる存在を持たず、それ故、結末は暗澹たるものになっているが、主人公にとってはその絶望すら歓喜となっている。その意味で、同じ『作家の日記』の『おかしな人間の夢』は『おとなしい女』の主人公・地下室の人間の袋小路からの出口となっていると指摘しているが、けだし卓見であろう。

ヴラジーミル・ジダーノフ氏と鈴木淳一氏の共著論文「ローセフのシンボル論とドストエフスキーの短編